

とく
徳

ほう
朋

そうたい
相對の物差し

藤原 千佳子



ふじはら ちかこ

1942-現在

三重県生まれ。真宗大谷
派浄秀寺前坊守

親鸞聖人が晩年に書かれた『唯信鈔文意』という書物の中に、このような言葉があります。

「唯」とは、ただこのことひとつという。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりというところなり。

「唯」は、「ただ念仏」の「ただ」です。二つならぶことを嫌う言葉であり、また「ひとりというところ」、ひとりという「ひとりぼっち」のことかと思いますが、そうではなく、「一人（いちにん）」ということです。（中略）

みなさんも私もこの世でたった一人、かけがえのないいのちをいただいています。でもわれわれは「^{そうたい}相對」、二つ並べずにいられないいのちを生きています。良いか悪いか、損か得か、好きか嫌い、勝ちか負けか。そういう二つの^{そうたい}相對の物差しで生きています。分別で^{ぶんべつ}生きているのです。そして自分が良し、人が悪し、そういう思いで生きています。

また二つ並べる中には、^{こう}幸か^{ふこう}不幸かということもあります。家が立派、財産もある、みんな元気、仕事もうまくいっている、という方を^{せけん}世間では「幸せな人」と言います。そういう方がいるという事は、反対に、そうではない方がいます。病気になる、大事な人とは別れる、仕事もうまくいかない。そういう方をわれわれは「^{ふしあわ}不幸せな人」と言います。これが世間の^{そうたい}相對の

まなこ
眼まなこです。幸こう、不幸ふこうが両極りょうきょくにあります。

ところが時々、「世の中の良い悪いで生きてきましたが、生きている間にいろんなことに出会いました。良い事ばかりならいいけど、思わぬことに出会いました。でも、今思うと、あの悪いことに出会ったからこそ、今この身をいただいております。本当にありがたく思っております」と言われる方に出会います。

そんな言葉に出会いますと、私たちがほとんど気付かずに過ごしている、「プラスが良い、マイナスが悪い」という物差しを破って、不思議と「このマイナスのことに出会ったからこそ」と言えるはたらきがあると思うのです。両極りょうきょくではなく、表裏ひょうり一体なのです。矛盾むじゆんしているようですが、ここが「世間の物差し」と「仏法の救い」との大きな違いだと思います。

『仏さまのよびかけ』



そうたい まなこ
相対そうたいの眼まなこでは自分の望む条件でしか現実を受け取れないのではないのでしょうか。プラス、マイナスを超えて全てのご縁には大切な意義があると思います。(哲弘 拝)



この「徳朋とくほう」は仏教を拠り所よとしている方々の言葉に直じかに触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。